

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

学生にとつての夫婦の寝室

大学での授業で、夫婦の寝室の改装を取り上げた。

寝室といっても、日本の場合は眠るだけでなく、その部屋でいろいろなことが行われている。読書・テレビ鑑賞・パソコン操作・電話・体操などなど。単純にベッドさえあればいい、というスペースではなさそうだ。そして、それは何も二人部屋である必要のない行動ばかりだ。

そんな寝室での行動形態を分析した後に、夫婦といえども同寝室が本当にいいのか？ を話し合った。まだ結婚していない学生ではあるが、そう遠くない将来の暮らしの話題に、いつも以上の関心を持って授業に臨んでいた。

まとめとして、夫婦の寝室を同室か別寝室かの選択ではなく「パーフェクト同寝室」「緩やかな同寝室」「緩やかな別寝室」「パーフェクト別寝室」の四つのパターンに分けた。そして同じ面積のなかでそれぞれの寝室パターンを、比較していた。別寝室⇨家庭内別居⇨と決めつける方もいるが、仲良し度とは関わらない夫婦の自立と共生を寝室

で模索してみたのだ。

その中の一つ「緩やかな別寝室」とは、扉によってお互いの空間を二分することができ、開けておけば行き来は自由なだけではなく、開放性が高い一つの空間になるというものだ。

結婚当初は同寝室でも、ライフサイクルの中で、だんだんと家の中の寝室も形態を変えていってもいいのではないか。だからこそリフォームが必要になる、というのが授業の全体の流れであった。

しかし、ある学生は、自分は結婚したら最初から「緩やかな別寝室」がいいと言った。なおかつお互いの行き来が自由にできる扉には、自分の側からだけ掛けることができる鍵を設置したいというのだ。私は穏やかな別寝室の扉の意味を、いびきの緩和や就寝時間の違う場合の照明の眩しさを抑える、あるいは体感温度の違いによる室温の問題を解決するためと思っていたため、少し驚いた。

家という器の中で、自立と共生を夫婦間でどう両立させるのがテーマだと思うが、片側からしか行き来

ができない扉がある夫婦の寝室は、フェアではないのではと思うのだ。

そんなことを意見交換しながら、実際の設計に入ってしまったのだが、四つのパターンの中で自分が結婚した時にどの寝室のパターンにしたいのか、その図面を一つ描かせた。いろいろな思いで図面を描いているようだったが、どのパターンを選んだのか、作業の途中で聞いてみた。

七〇人ほどいる授業なのだが、その中で「パーフェクト同寝室」にした生徒はたった一人だった。そして「パーフェクト別寝室」を選んだ生徒も二人だけ。残りは「穏やかな同寝室」と「穏やかな別寝室」が二分したのである。

設計にあたり、寝室は単純に主寝室一部屋ではないという、授業としては満足いく結果なのだが、もしこんな授業を聞かなかつたら、結婚したらもっと同寝室が当たり前と思っていたのではないだろうか。そう思うと先生であることの責任を改めて感じ、襟を正す思いだ。



西田恭子氏のプロフィール⇨一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手かけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。(株)日本建築家協会正会員。